

来るべき がん治療

〈9〉

「ストレスは病気の原因」とか「免疫力」とは具体的に何なのでしょか。今回はこれらの質問にお答えすべく、話題の「心と体をつなぐ免疫学」白血球の自律神経支配の法則」について二回にわたってご紹介します。

免疫学の歴史をひもとくと、一九六〇年代に胸腺が免疫の司令塔を担うTリンパ球の重要な教育・成熟臓器であることが分かって以来、それまで長いこと抗原抗体反応の学問＝血清学だった免疫学は爆発的な発展を見せました。その後数々の重要な発見が続き、複雑な免疫現象が解明されてきました。

近年の免疫学は免疫に関する個々の分子や遺伝子の研究が主流となりました。それで「木を見て森を見ず」のごとく、健康と発病そして治療における免疫の全体像を論ずる学説はありませんでした。特にがんの発生病因に関しては、発がん物質など外的要因ばかりが強調されて、真の犯人が見逃されて

きたようです。

自律神経は内臓、血管、リンパ節など広く分布している神経で、血液循環、消化・吸収・排泄(せつ)、内分泌、生殖など生命活動を維持してゆくと、生体のさまざまな機能を無意識的に調節する神経です。従来ホルモンによる免疫への影響は知られていました。自律神経が血液中に単独で遊離している免疫細胞を直接支配しているのは誰も考えつきませんでした。

この発端は十年ほど前、外科医であった福田徳医師が新潟大学の安保(あほ)徹教授を訪ね「晴れの日に限って虫垂炎の患者が多い。なぜ」と質

上、35-41%、一割に当たりの実数で二、二〇〇-二、八〇〇)を支配することを明らかにしたので。

生物が進化する時、最も原始的な免疫細胞であったマクロファージ(単球)から分化して、リンパ球と顆粒球(多形核白血球、好中球が主)が誕生しました。特に魚類が両生類・は虫類として上陸するのに従い、下痢便では脱水症になるため、水分を回収するための大腸が発達しました。大腸内の糞便の半分くらいは細菌から成ります。顆粒球は腸管での細菌感染から体を守る必須の役割を担っていますが、負の面も持ち合わせています。

長時間労働、悩みなど心身のストレスが多い現代社会では、交感神経優位・顆粒球過剰の状態が数カ月・数年と長期間持続しがちです。過剰な顆粒球は二-三日で寿命が過ぎて死滅する大量の活性酸素と酵素をばらまきながら周りの細胞を巻き添えにします。その結果、潰瘍(かいよう)などの組織破壊、血流障害、分裂上皮細胞の過度の再生促進、遺伝子DNAの変異などをきたします。

ストレス持続、引き金に

問したことからは始まり、福田安保理論の発見に至りました。自律神経のひとつ「頑張り、緊張」モードの交感神経がアドレナリンを介して白血球の中の顆粒(かりゅう)球(寿命二-三日、細菌の感染に備える、54-60%が理想的)を、「消化吸収・排泄のリラックス」モードの副交感神経がアセチルコリンを介してリンパ球(寿命一週間以

が、検査項目に入っていないことに表れています。

〒581-0817 大阪府八尾市久宝園二丁目三八ノ一
電話 0729(23) 8699
日ポリ化工株式会社 www.nippori.co.jp

温熱療法研究室主任研究員
獣医師・医学博士
浦川豊彦

自律神経免疫学の紹介(1)

urakawa@nippori.co.jp